

保育所における送迎時の子育て支援 —ハッピー7カードを使用した「親子関係」支援—

松井 剛太 ・ 松本 博雄 ・ 吉川 暢子
(幼児教育) (幼児教育) (幼児教育)
松嶋 佳加* ・ 山地 一輝*
(大学院教育学研究科) (大学院教育学研究科)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学大学院教育学研究科

Family Support at “Children’s Pick Up and Drop Off” in Child Care Center: Support for Parent-child Relationship through Using Happy Seven Card

Gota Matsui, Hiroo Matsumoto, Nobuko Yoshikawa,
Yoshika Matsushima* and Kazuki Yamaji*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Graduate School of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

要 旨 本研究では、保育所を対象に「親子関係」支援として、ハッピー7カードを用いた取り組みの効果を明らかにすることを目的とした。その結果、送迎時に子どもの機嫌を調整したり、保護者と対話したりするものとは異なり、親子関係の質を変化させるきっかけを作ることが示唆された。今後は、親子の二者関係に留まらず、より広い視点を持った取り組みを行う必要性が考えられる。

キーワード 子育て支援 送迎 親子関係 保育所

I. 問題と目的

1994年のエンゼルプラン策定以降、子育て支援に関する研究は段階的に増加している(太田ら, 2014)。テーマに関しても、少子化対策に関わる政策的なものから、子育て支援の概念を問うもの、あるいは支援ニーズや支援内容に関わる実践的なもの、また虐待や障害のある子どもを持つ家庭への支援、近年では貧困等への対応など多岐にわたる。大豆生田(2006)は、子育て支援の視点として、①子どもに対する支援、②親・家族に対する支援、③ネットワーク構築への支援、④地域の子育て環境への支援、

⑤社会システムへの支援、の5つを挙げている。これは保育士の行う子育て支援への期待が高く、扱う範疇も幅広いことを示していると言える。

しかしながら、保育所で働いている保育士がまず直面する子育て支援は、目の前で困っている親子をどう支えるかであろう。Cowanら(1998)は、親の子育ての有能性を高めるために、子どもに焦点を当てたアプローチ、親に焦点を当てたアプローチだけでなく、親子関係に焦点を当てたアプローチにも着目している。太田(2001)も、子育て支援の四つの相として、子ども、親、親子関係、地域を挙げているが、

その中心には「親子関係」支援を据えている。ところが、実際の保育現場を考えると、親子が揃って保育者と関わる時間は意外と少ない。そこで、親子が揃っている数少ない機会を大切に、効果的な支援を考えることも重要になるだろう。

親子が揃って保育者と会う機会としては、まず毎日の送迎時が想起される。保護者支援を考えたときに、送迎時の会話で保護者に何を伝えるかは大きな配慮事項となっている（片山，2016）。近年では送迎時の会話は、親子関係を支援する文脈よりもむしろ、保育者が保護者との信頼関係を構築することを主眼とすることが多い（廣瀬ら，2015）。確かに、保護者対応の難しさが指摘される昨今、送迎時は保護者との信頼関係を築くための貴重な機会と捉えるのも理解できる。しかし、送迎時の関わりは本来、保護者が子どもを認め、子どもは保護者から認められて満足感を得られるひとときを作るために行われるものである（荒井，1997）。

そこで、本研究では、送迎時に親子関係を支援することを主眼にし、後述するハッピー7カードの取り組みを行った効果を検討することを目的とする。

II. 方法

1. ハッピー7カードと使用方法

数十年前に香川県PTA連絡協議会で紹介されたもので、親子のふれあいを促すために使用されるものである（図1）。

カードにはそれぞれ親子で行うふれあい行動が描かれている。7つの行動は、「おでこにちゅ」、「ほっぺにちゅ」、「おでことおでこをこっつんこ」、「だっこして」、「おんぶして」、「だっこしてほっぺにちゅ」、「ほっぺとほっぺをびったんこ」である。図1は母親と子どもで行うものであるが、父親と子どものものもあり、ふれあい行動の内容は異なっている。本稿では、母親版を基礎にして各保育所でアレンジしたものを使用した。

ハッピー7カードの使用方法は、まず7枚の

カードを点線で切り取り、裏返した状態にして並べる。その中から子どもが1枚引き、出たポーズを親子で実施するというものである。これはもともと保育所で配布して定期的に家に持ち帰り、各家庭で楽しむ趣旨で実施されていた。しかし、実際のところ、家に持ち帰って実施する親子は一部に限られること、また家庭で実施している親子はそもそも関係が良好である場合が多く、家庭で実施していない親子にこそ必要であると思われた。そのため、本研究では保育所内で送迎時に全ての親子にやってもらうものとして使用した。



図1 ハッピー7カード（母親版）

2. 対象園と事例収集の手続き

20XX年の10月にK県における83の私立保育園で実施してもらった。実施にあたり、最低2週間継続して行うこと、最初は先生と子どもでやってみせて、「園での取り組み」として、すべての親子が実践できるよう促すことを伝えた。

加えて、事前に各保育所の送迎時の事情に応じて工夫して使用するように伝えた。そのため、通常の使い方通りにした保育所もあれば、送迎時だと慌ただしいため、予め保育者が実施するふれあい行動を選び、日ごとにそれを変えて行うといった工夫も見られた。また、7つのふれあい行動の数を減らして簡単にできるもののみに行う場合もあった。さらに、ハイタッチなど、独自にやりやすいふれあい行動のカードを作成して用いた保育所もあった。

ハッピー7カードの実施後、各保育所で実施にあたった保育者から、特に変化があったと感

じられたことに関して、どのような変化があったかを事例として提出してもらい、分析の対象とした。

3. 分析方法

まず、レポートの内容を書き起こした後に3名の分析者で熟読し、意味内容のまとまりごとにテキストを区分した。全部で149のテキストとなり、これらを分析単位とした。そして、次の2つの方法で分析を行い、変化が起きた対象とその内容の特徴について調べた。

- (1) 149のテキストごとに、変化が起きた対象として、「子ども」、「保護者」、「保育者」、「その他」のいずれに該当しているかを調べた。一つのテキストに複数含まれる場合もあった。また、その変化を「良い」「悪い」「変わりなし」に分類した。
- (2) 149のテキストに関して、それぞれの記述内容をカード化した後、KJ法に準拠して一次カテゴリー、二次カテゴリーに分類する手順をとり、記述の特徴を示した。

Ⅲ. 結果と考察

(1) 変化した対象と分類

まず、ハッピー7カードを通して変化した対象と内訳について述べる(図2)。子ども、保護者の変化が多く報告された。テキスト内には、親子がお互いに変化したという記述が多く、双方向的な影響があったと思われる。保育者の記述は少数であったが、いずれも保護者と

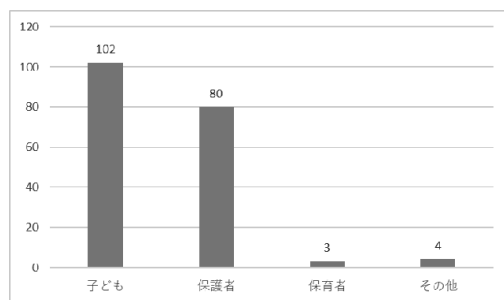


図2 ハッピー7カードを通して変化した対象

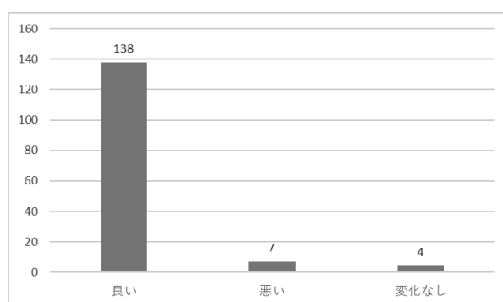


図3 ハッピー7カードを通しての変化について

会話をしたり、向き合う姿勢に前向きな変化があったようである。

どのような変化だったかについては、良いとしたものが圧倒的に多かった。ただし、レポートの性質上、良いものを抜粋して報告した者が多かったことも推察されるため、留意する必要があるだろう。悪い、変化なしは少数であった(図3)。

(2) 変化内容の特徴

次に変化の内容について、分析した結果を報告する(表1)。

まず、一次分類では、「受け入れの変化(60)」、「子どもとの関わりの変化(37)」、「親子の表情の変化(31)」、「親子以外の関わりの変化」、「変化なし(6)」、「その他(6)」の6つのカテゴリーに分類された。

続いて、二次分類では、受け入れの変化として、「スキンシップで機嫌がよくなる(27)」、「離れるときの儀式になる(22)」、「カードを求める子ども(8)」、「保護者と離れるのがさみしくなる(3)」の4つとなった。次に、子どもとの関わりの変化では、「子どもと関わる時の言動の変化(15)」、「積極的に関わろうとする態度(11)」、「年上のきょうだい児のふれあいの機会(8)」、「家庭での子どもとの関わりの変化(3)」の4つであった。親子の表情の変化では、「親子が笑顔(14)」、「子どもが笑顔(10)」、「保護者がやさしい表情(7)」の3つが挙げられた。そして、親子以外の関わりの変化では、「保護者と保育士との関わりの変化(3)」、「保護者同士の関わりの変化(2)」、「子

ども同士の関わりの変化（２）」、「祖父母との関わりのきっかけ（２）」の４つとなり、変化なしでは、「乳児は変化なし（３）」、「やらない（３）」の２つに分けられた。

以下、一次分類ごとに内容を見ていく。「受け入れの変化」では、「スキンシップで機嫌がよくなる」、「離れるときの儀式になる」に見られるように、登降園がスムーズになるというものが多かった。子どもの気持ちになると、ハッピー７カードによって、保護者とふれあうことができる機会が確保されていることが安心感になっていると考えられる。また保護者の側もなかなか離れてくれない子どもに対して、心苦しさや焦燥感を持つことがなくなるだろう。

そこから、「子どもとの関わりの変化」が見られる場合もあると思われる。「子どもと関わるときの言動の変化」にあるように、お迎えの時間に対して、子どもが思うようにならない時間から、子どもがふれあいを喜んでいる時間へと意識が変わることで、保護者の言動にも落ち着きが見られるケースもあった。また、ハッピー７カードをきっかけに「積極的に関わろうとする態度」が生まれて、保護者のほうがむしろ嬉しい時間と捉える様子も見られたようであった。

保護者の関わりが変化すれば、「親子の表情の変化」も見られるだろう。送迎時に「親子が笑顔」を見せることも増えて、保育所全体においても、送迎の時間がほほえましい瞬間になったことも想像できる。

また、親子以外にも、「保護者と保育士」や「保護者同士」の関わりにも少数ではあるが、変化も見られたようであった。つまり、親子にとどまらず、保育所の全体的な関係性の変化にも寄与する可能性が示唆された。

一方で、「変化なし」もいくつか見られた。まず、乳児の場合は普段から親子のスキンシップが取られているため、ハッピー７カードを実施しても変化はないというものがあつた。また、保護者に理解してもらえず、取り組んでもらえなかった事例もあつた。このように、対象とする年齢に応じた効果の違いや、実施しても

らえない状況については、今回の調査では明らかにできなかった。

IV. 総合考察

本稿では、ハッピー７カードを用いて、送迎時に親子のふれあい行動を促す支援を実施し、その効果を検討した。保育所における送迎は、親子が離れる、そして再会する瞬間である。したがって、その瞬間にお互いが心地よい感情を持ってない場合、離れた後や再会して共に過ごす時間における両者の機嫌や関係性にまで影響が及ぶことが想像される。

しかし、保護者がせわしなく送迎を行うことの多い保育所においては、送迎時にそのような関わりを改善するきっかけを作るのは容易ではない。村山ら（2005）の調査によると、子どものことで保育者が保護者と話し合う機会は、「週３日以上」、「週1,2回」を合わせても、40%の保育所に過ぎなかったという。送迎のスタイルが多様になっている実態の中で、改めて送迎時の時間の持ち方と意義について議論がなされるべきであろう。

本稿のハッピー７カードは、送迎時に子どもの機嫌を調整したり、保護者と対話したりするものとは異なり、親子関係の質を変化させるきっかけを作ったアプローチであった。これは、子ども、親の一方に関わるものではなく、親子関係の質を変化させることが、親子それぞれの適応に影響するという考えに根ざしている。

前述したように、実際の保育場面を考慮すると、親子が揃って保育者と対面する時間は少ない。したがって、実質的に「親子関係」支援とは、子どもと保護者に対して、それぞれを支えることで、その結果として親子関係が改善されるという意味が含まれていると言えよう。しかし、本研究のように、送迎時における親子関係の質を変えるきっかけを作ることで親子ともに表情よく離れたり、再会したりできたことにより、子育てにおける言動や態度にも肯定的な変化が見られた。つまり、短い時間であっても、

表1 ハッピー7カードを用いた変化内容の記述の分類

一次	二次	記述内容の例
受け入れの変化 (60)	スキンシップで機嫌がよくなる (27)	3歳児のMちゃんと4歳児のNちゃんは年子でいつもどちらかが登所するときにぐずぐず言っていた。母は泣いたり離れようとしなかったりするとイライラしている様子があった。一人が機嫌がよくても一人がぐずぐず言うので毎日無理やり送り出している様子もあった。ハッピー7カードを初めて一週間くらいで「抱っこしてー」と子どもが言うとは笑顔で受け入れ、子ども達はぐずぐず言うことなく母と離れられるようになった。抱っこして笑顔で保育所に行くようになり母も登所時に笑顔が見られるようになり、子どもとのスキンシップを楽しめるようになってきた。「このおかげで朝が楽になりました」と母は言っていた。
	離れるときの儀式になる (22)	毎朝、お母さんと離れることがつらく、激しく泣く姿が見られる。少しずつ毎朝、1つの約束事(動作)をしたらバイバイをするという流れも定着してきたようで、「今日もタッチして10抱っこしたらバイバイする」と気持ちを切りかえ納得してバイバイする姿も増えてきている。このやりとりから7カード以外にも、おうちでどうやってバイバイするのか約束事を親子の間でしてから登園する姿もあり、子どもの泣きを見て困っていたり不安そうな顔をしたりしていたお母さんも「しっかり約束を守ってくれています！」や本児の様子の変化を嬉しく感じていることを伝えてくれる。
	カードを求める子ども (8)	子どもたちのほうからカードをせがむようになる。2回したがる子が多くなった。
	保護者と離れるのがさみしくなる (3)	母とひつついたあとに離れるのがさみしくなり泣いてしまうこともあった。
子どもとの関わりの変化 (37)	子どもと関わる時の言動の変化 (15)	母親は産後で現在仕事を休業中、年齢も若く子どもに合うのではなく、すべて自分中心である。登園、降園時間もバラバラでほとんど朝のおやつ時には間に合わない。お迎えに来て笑顔がなく、一生懸命自分でくつをはいている我が子にも「もたもたするな」「早くくつはけ、ウザッ」と言い、子どもの目線に立つことはない。カード初日に説明すると「何、それ」と少し気が乗らないようだった。「抱っこでギュッ」や「ホッペにチュー」のカードが出る率が多く、お互い最初は恥ずかしそうだったが、毎日していくうちに自然に笑顔が増え、母親から積極的に「はいおいで」とやさしいまなざしで抱っこしたりチューしたりしていた。子どもに対して乱暴な言葉もかえなくなった。
	積極的に関わろうとする態度 (11)	ハッピーカードをすることによって、本児の母親との関わりが増えた。母親がカードをどれにするか選び、本児の名前を呼びながらぎゅっとしたり、タッチしたりしていた。最初の方は保育者が声を掛けてカードの取り組みをお願いしていたが、数日経つと、保育者が声を掛けなくても、母親自らカードを選び積極的にハッピーカードに取り組んでくれるようになった。
	年上のきょうだい児のふれあいの機会 (8)	大きい年齢や下の子がいる家庭では、「ふれあい」を持つ機会や下の子に対する我慢などできっかけがなく、今回のようなものが、ふれあいの一部となりきっかけとなっていた。
	家庭での子どもとの関わりの変化 (3)	家でもハイタッチが増えた。
親子の表情の変化 (31)	親子が笑顔 (14)	子どもも保護者も表情が和らいでいた。保護者も子どもも笑顔で「いってきます。」「いってらっしゃい。」を言うようになった。
	子どもが笑顔 (10)	4、5歳児クラスの子どもたちの中には口では「嫌やあ。やめてよ」と照れくさそうに言いつつも、実際にそのポーズをすると嬉しそうになる子が何人もいました。何ともいえないその笑顔が印象的でした。
	保護者がやさしい表情 (7)	時間がない様子でイライラした雰囲気であっても、タッチをするときにはやさしい表情となる。また、子どもの顔も見ずに行ってしまうこともあった保護者が、顔を見て出かけるような様子になってきた。
親子以外の関わりの変化 (9)	保護者と保育士との関わりの変化 (3)	カードを通して、保護者との会話がより弾んだり、「いっぱい触れてほしい」という、声にならない部分の子どもの思いも間接的に保護者の方に伝える機会となったと思う。
	保護者同士の関わりの変化 (2)	ほかの保護者ともほとんどかかわりのない方でした。今回もなかなかカードをひこうとしなかったが、他の保護者の方がひいているのを見てハッピーカードをひいてくれるようになりました。その内に他の保護者の方から話しかけられ、会話をする様子もみられました。ハッピーカードを通じていつも以上に子どもさんとふれあえたり、他の保護者の方と向き合えたと思います。
	子ども同士の関わりの変化 (2)	お友だちが帰るとき扉のところまで行き、子ども同士が互いに手を伸ばしてハイタッチして別れる姿が見られるようになりました。「また明日」と別れているように見えるとともに手と手の触れ合いを楽しんでいるようにも思いました。
	祖父母との関わりのきっかけ (2)	祖父母の送迎の世帯もある。孫と触れ合えて喜び「うれしい」との声もあった。
変化なし (6)	乳児は変化なし (3)	乳児(0・1歳ごろ)は常にお迎えがくると抱っこしていることが多いので、大きな変化は見られなかった。
	やらない (3)	保護者自身、スキンシップが苦手だったり面倒くさがったりして、なかなかハッピーカードの良さや意図を理解してくれませんでした。
その他 (6)		

親子関係を変えるようなきっかけを与えるという発想を持つことも重要であると考えられる。

さらに、今回の研究では、少数ではあったが、親子以外の関わりの変化も報告された。保育所が家庭さらには地域に開き、支えるという位置づけを持つことを考えるならば、親子の二者関係に留まらず、より広く生態学的な視点を持つことも重要である。この点は、本稿で実施したハッピー7カードの方法では不十分であり、今後の課題といえるだろう。

引用文献

- (1) 荒井恭子 (1997) 登園時、降園時大切にしたいこと. 教育じほう, 591, 34-37.
- (2) Cowan, P. A., Powell, D. & Cowan, C. P. (1998) Parenting Interventions: A Family Systems Perspective. Damon, W., Sigel, I. E. & Renninger, K. A (Eds.). (1998) Handbook of child psychology: Child psychology in practice, Vol. 4, 5th ed. p 3-72. John Wiley & Sons.
- (3) 廣瀬優子・和田上貴昭・乙訓稔・松田典子・高橋久雄・三浦修子・長谷川育代・高橋滋孝・高橋智宏・高橋紘 (2015) 保育所が行う家庭との連携・協働プログラムの実証・研究—イベントサークル等の調査—. 保育科学研究 6, 54-63.
- (4) 片山美香 (2016) 若手保育者が有する保護者支援の特徴に関する探索的研究—保育者養成校における教授内容の検討に生かすために—. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 6, 11-20.
- (5) 村山祐一・子育て支援に関する共同プロジェクト (2005) 保育・子育てに関する全国調査. 鳥取大学生涯教育総合センター.
- (6) 大豆生田啓友 (2006) 支え合い、育ち合いの子育て支援—保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論. 関東学院大学出版会.
- (7) 太田光洋 (2001) これからの保育内容—現代社会の保育問題とこれからの保育内容—. 太田光洋編 (2001) 保育内容の理論と実践—生きた子どもの姿をとらえる—. 同文書院, 189-190.
- (8) 太田光洋・中山智哉・渡邊望・松尾麻紀・安氏洋子・濱田尚志・山下文一・伊瀬玲奈・山本直樹・那須信樹 (2014) 子育て支援施策の変遷と日本保育学会年次大会における子育て支援研究の動向. 中村学園大学発達支援センター研究紀要, 5, 13-23.

付記

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた保育所、及び親子の皆様へ深謝いたします。また分析にあたり、稲葉桃子さん、佐藤奈々さんに協力をしてもらいました。ここに記して、感謝申し上げます。